第6回日本救護救急学会学術集会

演題登録

セッション名：

『シンポジウム２：マスギャザリングイベントにおける救急艇の社会実装に向けた取り組み』

筆頭演者氏名（ふりがな）：　横堀　將司（よこぼり　しょうじ）

『**救急艇社会実装協議会の意義と役割**』

**演者・共著者・所属機関**

横堀將司1、2、4)　横田裕行2、3、4)　 加藤聡一郎4)　三宅康史4)　弘重壽一４）

植田広樹4)　田中秀治４）　奥寺敬４）　山口芳裕４）　坂本哲也４）　有賀徹４） 砂田向壱４）

1)日本医科大学大学院医学研究科　救急医学分野

2)日本医科大学救急医学教室

3)日本体育大学大学院　保健医療学研究科

4)日本救急艇社会実装協議会

* 抄録（概ね800字程度）

|  |
| --- |
| わが国の排他的経済水域は国土面積の12倍と、その広さは世界6位で、世界でも有数の海洋国である。全国の沿岸には多くの港湾が整備され、湾岸域やベイエリアへの人口・産業集中も懸念されている。元来わが国の病院前診療はドクターカーやドクターヘリに支えられてきたが、上記背景があるにもかかわらず、水上交通を活用した救急搬送システムは依然十分に構築されていない。本発表では、上記を鑑み発足した救急艇社会実装協議体の意義と役割について述べる。  我々は2021年より15回に及ぶ会議を行い、救急艇の仕様、救急艇の配置、人員確保（身分、保険、手当等々）、東京消防庁との連携、事前訓練、患者発生から病院搬送までの連携などを議論した。事前訓練の後、東京オリンピック期間中に昭和大学江東豊洲病院を基地として準備したクルーザー型救急艇を用いて活動をおこなった。18名の医師、17名の救急救命士が本活動に参加した。参加者（33名）からの事後アンケートでは、救急艇をさらに普及させる方策として、消防機関や行政執行機関との連携強化（93.9%）やドクターカー、ドクターヘリとの三位一体の整備・連携を求める意見（75.8%）、活動における医師、救命士、看護師の連携を求める意見が多かった（スタッフは医師１、救命士１、看護師１の搭乗員が良かろうとの意見：57.6％）。今回の参加者の多くのスタッフが病院前救護活動の経験者であったが（医師69%、救命士100%）、彼らプロフェッショナルの立場からも救急艇のさらなる普及を期待する声も多くあり、また参加者全員（１００％）が次回も同様の活動に参加したいと答えた。一方、仕様・装備・適切な搬送患者の選定などが今後の課題との指摘もあった。更なる普及のため、運用方法の構築など継続した努力が必要である。 |